

## 2018年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2018年度の学会賞が決定し、奨励賞（単著部門）として駒崎道会員、永野咲会員が選ばれました。

第66回秋季大会期間中の2018年9月8日に、金城学院大学アニー・ランドルフ記念講堂において、開会式に引き続き授賞式が行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



左から白澤委員長、駒崎会員、永野会員、金子会長

### ◆ 奨励賞（単著部門） 駒崎 道（専修大学）

受賞作：『GHQ「児童福祉総合政策構想」と児童福祉法

——児童福祉政策における行政間連携の歴史的課題』

（明石書店、2017年9月25日刊）

本書は、2014年博士後期課程の学位論文に加筆したものである。紙面をおかりし、再度博士論文をご指導いただいた日本女子大学名誉教授岩田正美先生はじめ、修士論文をご指導いただいた日本社会事業大学名誉教授山下英三郎先生、多くの先生方に心よりの感謝を申し上げます。

今回の受賞において選考委員の方々からご指摘いただいた点を、いま改めて考えている。本書においては、研究動機としてスクールソーシャルワークの現場実践から得た「子どもの福祉を保障する行政間連携とはなにか」という課題の入り口によりやく立てたにすぎず、福祉と教育の連携も含め残された課題は多い。今後もこれらの課題を丁寧に検討する予定である。

しかし課題山積にも関わらず、この奨励賞をいただけたことは今後の研究において大きな励ましであった。それは、制度構造自体が生み出す社会福祉問題の形成過程を明らかにする手法として、政策の歴史的事実を丁寧に分析、再検討することの意義を認めていただけたという点である。筆者自身の研究課題においては、実践現場における行政間の連携課題の根本を深く見つめなおす視点を獲得する方法として有用であったが、それに留まらない可能性をご指摘いただけたことも嬉しいことである。これは、博士課程入学時に、子ども家庭福祉分

野において歴史研究手法継続を躊躇する私に、岩田先生が半分あきれながら政策史研究の重要性を説いてくださった原点に戻ることもなる。奨励賞の受賞は、子ども家庭福祉分野研究における歴史研究手法への迷いを払拭し、子ども家庭福祉分野研究における自分の役割を果たしていく意志を後押ししていただけた。このことは何よりも感謝である。また、授賞式後に上野谷加代子先生から「道は開ける」とお声がけいただいたことも忘れられない。社会福祉学会会員の皆様、選考委員の先生方、事務局の方々、明石書店の方々、研究仲間にも改めて感謝申し上げます。

◆ 奨励賞（単著部門） 永野 咲（昭和女子大学）

受賞作：『社会的養護のもとで育つ若者の「ライフチャンス」

——選択肢とつながりの保障、「生の不安定さ」からの解放を求めて』

（明石書店、2017年12月10日刊）

この度は、日本社会福祉学会の奨励賞に選定いただき、大変光栄に存じます。審査の労をお取りいただいた審査員の先生方にお礼を申し上げます。

本書は、2015年度に提出した博士論文を一部加筆・修正したものです。これまでにご指導くださった先生方、調査にご協力いただいた皆さま、出版助成いただいた東洋大学、出版いただいた明石書店に深謝いたします。

私が、児童養護施設をはじめとする社会的養護の世界に出会ったのは、大学2年生の社会福祉実習の時でした。10数年経った今、勤務校で実習指導を担当しているのも不思議な感覚です。当時の実習日誌を、これから実習へ行く学生とともにめくっていると、あの頃の葛藤が鮮明に思い出されます。今振り返ると、あの時、見聞きし、感じたことが、この研究のスタートだったと思います。

その後、社会的養護のもとで育った当事者の方々と活動を共にするようになり、その中でも多くの出会い（と別れ）がありました。本書は、こうして出会った方々の強さと苦しみをみつめ、これからの子どもたちが同じ困難を抱えないための一助を得たいと始めた研究でしたが、終始、研究・実践両面における自身の不甲斐なさとの対峙の連続でした。その中でも、「ライフチャンス」という分析枠組みから、なんとか調査・分析・考察を続け、多くのお力添えによって本書を書きあげることができました。それだけに、本書に対し、今回のご評価をいただけたことは、驚きとともに大きな喜びとなりました。

現在、日本の社会的養護制度は大きな転換点を迎え、これまで以上のスピードと熱量で、社会的養護の形態が論議されています。しかし、社会的養護が果たすべき役割は、形態によって左右されるものではありません。社会的養護が（その形態にかかわらず）保障すべきもの、それは本書を通じて示してきた「ライフチャンス」なのだろうと考えています。今回の受賞を大きな励みとし、これからの社会的養護にわずかでも貢献できるよう、これからも研究・実践に尽力したいと思います。